

『家族・私有財産・国家の起源』に学ぶ

第1回

関東ブロック

学習を進めるにあたり

これから一年間にわたりエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』（以下『起源』）を学習していくこととなります。

学習を進めるにあたり、群馬県協会の猪野さんに報告していただきます。

『起源』の全体像

まず、文献を読むにあたり、タイトルから受ける印象は、『資本論』『国家と革命』『空想より科学へ』といった厳めしいタイトルの古典に比較していくぶん穏やかで、ほのぼのとしたもの

であるかもしれません。

しかしながら、読み始めると、この文献が民俗学や経済学など多角的に論考されたものであり、読み進めるのに骨の折れる文献であることにすぐ気づくこととなります。

レーニンは、自身の著書である『国家と革命』で『起源』を多く引用し、それを基礎に論考しています。1919年7月のスヴェルドロフ大学の講義の中で『起源』についてレーニンは「なるほど、この著作のすべての部分が、必ずしも同じ程度に入りやすく、わかりやすく記述されているわけでは

ない。ある部分は、すでにある程度の歴史のおよび経済的知識を持っている読者を前提している。」「この著作を通読していつべんに理解できないとしても、それによって困惑してはならない。そういうことは、かつてほとんどだれ一人としてきたためしがないのである。」と述べています。つまり、『起源』はレーニンにそう言わしめるほどの難解な古典だということです。

レーニンをしても難解なのでですから我々にとってはなおさらのことです。ですから、私たちが『起源』の学習を進めていく際には、今までの学習で得

◆みんなの学習講座



晩年のエンゲルス（1981年）



ルイス・ヘンリー・モーガン

た知識を総動員して、根気強く諦めずに取り組む態度が大切と思われまふ。仲間と知識を持ち寄り議論しながら、学習を進めることで多くの学びが得られるものと考えまふ。

書かれた時代背景

『起源』は、エンゲルスによつて、彼の朋友マルクスの死の翌年の1884年にロンドンで書かれました。

1880年代は、資本主義が自由競争の段階を経て、独占の時期に入りつつあり、やがて帝国主義を迎えようとする状況下にありました。当時の資本主義諸国の労働者階級は独立した政治勢力として成長し、労働者階級と資本家階級とのあいだの階級闘争も激しく闘われるようになっており、労働者がこの闘いを有利に進めるために理論的裏付けを強化する必要が高まってきました。

ですから、マルクスの死は、彼の思想が労働者を捉えることを恐れる支配者階級にとって反撃のチャンスでした。彼らに味方する修正主義者や日和見主義者はマルクスの理論に批判・修正を加えるべく積極的姿勢に転じつつあり

ました。

すでに1870年代後半に、エンゲルスはマルクスと相談のうえ、『反デューリング論』の著作を行っています。これは、そのころ小ブルジョア的、日和見主義的分子を抱え込んで統合したばかりのドイツ社会民主党に小ブルジョア社会主義の影響を与え始めていたデューリングに対抗する目的で書かれたものでした。この著作は、マルクス主義の世界観の全体系によつてドイツのプロレタリア政党的理論武装を促すことを目指したものでした。

しかしながら、特に革命の根本問題である国家の階級の本質において、この著書はドイツ社会民主党内で十分に理解されませんでした。そこで、この問題を解決するために、エンゲルスはどうしても国家の発生、役割、意義などについて全面的・歴史的に明らかにする必要がありますと考えました。

また、『起源』の1884年の序文

においてエンゲルスは、「以下の諸章は、ある程度まで（マルクスの）遺言の執行をなすものである。」として、『起源』の構想がエンゲルスひとりのものではないことを述べています。これは、『起源』を書くにあたりエンゲルスがマルクスの遺稿の中から発見した「モーガン『古代社会』の摘要」もそのきっかけとなつていているということなのです。

さらに、その頃のドイツは、ビスマルクの『社会主義者鎮圧法』（1878年）により革命的出版を行うことが困難な環境であつたことも忘れてはならない点です。この法律は「公安を脅かすような方法で現存国家ないし社会に秩序を破壊することを目的とする」社会主義的労働組合や政党、集会、出版を厳禁し、これに反すれば、追放、禁固、罰金の厳刑を科すというものでした。このような状況下でも、エンゲルスは労働者階級とその党の前進のた

めに必要と思われることは、弾圧に抗してでも行おうとする戦闘的な姿勢を堅持し、『起源』を、発禁処分を覚悟してもなお革命的労働者に向けて語りかける書物として書いたのです。

学習が目指すもの

エンゲルスは、『起源』において社会の発展を、階級矛盾を軸に考察し、プロレタリアートの革命闘争における理論的命題を引き出していきます。

今日、疑いもなく当然と考えられていた私的所有や単婚家族さらには国家といった諸制度さえ、エンゲルスによれば、物質的生産力の一定の発展段階に応じて生じたものであり、そして、そこからさらに生産力が発展すれば、階級は消滅し国家を含む諸制度も消滅する段階に到達するとしています。国家とは歴史の特定の時期に存在する、搾取階級が被搾取階級を搾取し続ける

ための装置であり、階級対立が和解しえないものであることを表現する暴力装置であるとエンゲルスは、把握しています。このことは、生産力の発展による資本主義社会の矛盾の深化によつて、ブルジョア階級が打倒された社会主義社会からさらに共産主義社会へ移行する中で、国家もその存在理由を失い消滅することは必然であるということでもあります。

私たち労働者が、階級闘争により支配者階級に打ち勝つことで、階級の新しい新たな世界を作り出し、真の自由を手にできるということは、私なりに理解していたつもりでした。しかし、この著作を読むことでその理解が表面的で浅いものであったことに気づかされました。打倒すべき国家、支配者階級といったものが、いつどのような作用によつて生まれたものなのかということに対し、知っているつもりでいたのにまったく理解していなかったことを

◆みんなの学習講座



思い知ることとなりました。

また、労働の発展から生産力が高まり、私有財産の発生を端緒にした社会の移り変わりの中で生じた、いわゆるジェンダーの問題についても、『起源』が示唆を与えている点は注目すべきことです。そのため『起源』には、日本

において先進的な女性問題研究家や女

性運動家幹部や活動家の間でテキストとして読まれてきた歴史があります。

家族史の中で、女性の地位は太古においては高かったのに、文明時代からは私有財産が生じ、しかもそれはもっぱら男のものであったことで、男の情欲の奴隷の地位にまで落とされたということです。そして、エンゲルスは、

家事労働が女性にとつとるに足らないものとなり女性が職場に大々的に進出し、男女が対等の立場となることで女性解放は可能になると考えています。そのことは、経済的事由による打算婚ではなく、互いの尊敬や愛に基づく婚姻実現の条件でもあると考えています。その条件の実現のためには、資本主義社会内のこととしてばかりでなく、女性抑圧の本源的な問題である資本主義を一掃する闘いを進めていかななくてはならないというのが、女性解放の問題についてエンゲルスの示唆するところ

と思われま

す。このようにして、不十分ながらも読破した今では、古代社会から現在までの社会の変遷をもたらした仕組みやそのことで生じた問題について、さらには、未来に向けても社会は変遷し続け、その中で現在の問題も解決しうるものであるという必然性をおぼろげながらも理解できるようになってきたと思います。

新しい社会を目指す運動を進めるためには、現在の問題をルーツから理解することの必要性を感じます。現在の問題にばかり気を取られ問題の本質から遠い表面的な理解では、社会を変える力は生まれません。この文献の学習はこのことに関して多くの学びを得られるものと確信しています。

序文について

本文に入る前に、エンゲルスの論理

展開においてなぜ家族の諸形態を最初に重視しなければならなかったのか、そして、家族の諸形態について述べる際に根拠としたモーガンによる先行研究について確認しておきます。

『起源』においてエンゲルスは、家族形態の変化は生産力の発展と不可分の関係にあると、史的唯物論の立場から明らかにしています。

初版の序文で、「唯物論的な見解によれば、歴史における究極の規定的要因は、直接的生命の生産と再生産とである。しかし、それ自体さらに二通りに分かれる。一方では、生活資料の生産、すなわち衣食住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方では、人間そのものの生産、すなわち種の繁殖が、これである。ある特定の歴史的時代およびある特定の国土の人間の生活が営まれる社会的諸制度は、二種類の生産によって、すなわち、一方では労働の、他方では家族の発展段階によって制約

される。労働がなお未発達であればあるほど、またその生産物の量が、したがってまた社会の富が乏しければ乏しいほど、社会秩序は圧倒的に血縁の紐帯に支配されるものとして現れる。」とエンゲルスは述べることで、彼の理論構成で、なぜ家族の諸形態が重視されなければならないのか、その根拠を明らかにしています。

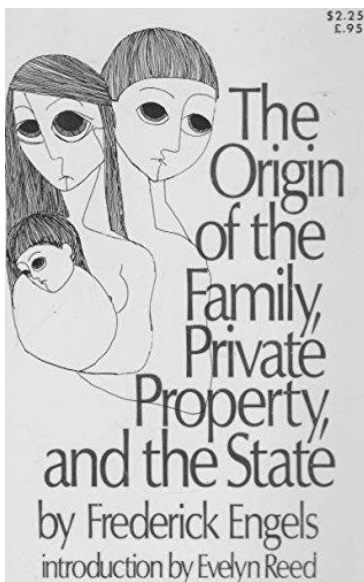
エンゲルスによれば、家族形態は物質的生産の発展水準によって制約される関係にあります。「書かれた歴史以前の社会」（原始共産主義社会）の物質的生産が未発達な社会では社会の秩序は、血族も含む家族の中ですべて処理できるため家族関係中心の秩序ですが、物質的生産の発達によって到来した階級社会では私有財産をめぐる関係が中心の秩序へと転換をしていくことが必然であることをエンゲルスは明らかにしているのです。そして、その転換は国家に総括される新しい社会の成

立へとつながっていくということです。このように家族と国家は互いに独立して存在するのではなく、歴史発展において切り離すことができない結びつきを持つものです。ですから国家を論じるためには、その源流である家族を最初に論じなければならぬというのが、エンゲルスが最初に家族の諸形態を重視した理由なのです。

さて、マルクスはアメリカの人類学者であるモーガンの著作『古代社会』に示されたモーガンの古代史に関する研究成果より、多くを学びました。マルクスの死後発見されたマルクスが『古代社会』をドイツに紹介するため準備していた詳細なノートとエンゲルス自身の研究成果も加えて書かれたのが『起源』です。

ところが、根拠となるモーガンの研究成果は、原始社会史において革命的な内容であったにもかかわらず、モーガンがアメリカ人であったことも一因

◆みんなの学習講座



『ザ・ファミリー、私有財産、そして国家』 Pathfinder Press 社

1973年1月1日

この国家理論が述べられている章といえます。第一章から第八章は、家族の形態変化、私的所有の発生、階級の発生、国家の発生がどのようにならざるを得ない必然性をも

となつて、イギリスの排外主義的な学者たちによつて黙殺されて、不当な扱いをされてきました。

それに対しエンゲルスが、バツハオーフエン、マクレンアンおよびモーガンの学説を比較紹介して、モーガンの学説の正当性を立証しているのが第四版の序文です。それによつて、エンゲルスが論述する際に根拠としたモーガンらによる先行研究の妥当性と『起源』の信ぴょう性が証明されています。

『起源』の構成

『起源』は全体として、私的所有

階級、国家の消滅を暴露していきます。そして、全体を総括して結論を述べているのが第九章にあたります。第九章の最後のほうでは国家の発生と消滅の必然性の説明およびマルクス主義による国家に関する規定付けが厳密に行われています。つまり、この章は全体の結論として『起源』の核心であるマルクス、エンゲルスの国家理論が

つて起こつたのかを述べていくことで、第九章で述べられている結論の理論的土台を確立している部分です。

つまり、第一章から第八章までが根拠で第九章が結論という構成となつていくということです。あらかじめこの全体の構成を把握しておけば、多少理解が困難な箇所があつても、何とか読み通すことができると思います。

一年間の学習と活発な議論により、多くの学びがあることを期待しています。

引用および参考文献
原典解説

『家族、私有財産および国家の起源』
畑田重夫 青木書店 1968年
原典

『家族・私有財産・国家の起源』
岩波文庫版